

令和元年 10月号

◆日根野聖子 選

小西昭夫先生の、俳句とコメントの朗読作品「チンピラ」シリーズの第五弾です。毎年五月に俳句とアートの作品展「遊五人展」を開催され、その会期中に披露される期間限定の貴重な作品です。

「チンピラV」

小西昭夫

鶉は羽を亀は甲羅を干しており

これも日向ぼっこなのでしょうか。

草餅の一人にひとつでは足りぬ

和菓子はどれも上品な大きさです。

あの頃は明日があったソーダ水

あれは間違いなく青春の飲み物でした。

少しなら貸してやろうか小判草

形もそうですが、やがて色もそうなるのです。たくさんあると、ちょっと太っ腹になります。

転居先教えてくれぬかたつむり

わが家のかたつむりはどこへ行ったのでしょうか。

フランスへ行ったかわが家のかたつむり

困った時のフランスであります。

右手にバナナ左手に牛乳

俳句で大切なことは、元気で、楽しく、くだらないということでもあります。

帰宅してすぐ開けるなり冷蔵庫

暑い一日でした。

その昔トマトは水に浮いていた

家に冷蔵庫がなかったころのことです。

くちびるを舐めれば塩辛とんぼかな

人間に塩味は必要です。

闇鍋の奉行どこにもおらざりき

鍋料理には、それをとり仕切る奉行が必ずいるのですが…。

昼来れば夜を待ちおる暑さかな

今年の夏も思いやられます。

天道虫話しかければ飛びにけり

ぼくは仲良くしたかったのですが…。

晩酌に少し早いが昼の酒

無季の句であります。

段畑のみかんの行儀よく熟れる

愛媛の売り、県民性は「まじめ」であります。

河豚食いに行くやたまたま妻の留守

勇んで出かけて行きました。

妻の留守白菜鍋は三日目に

友人に白菜をたっぷりもらいました。カミさんは大阪の娘のところ行っていました。

妻の留守白菜鍋を今日もまた

四日目のことです。

妻の留守白菜鍋はまだ続く

まだまだ帰ってきません。

白菜はまだまだまだまだ残る

妻が帰宅しました。

浮いてくる柚子を沈めてまた浮かす

冬至の夜です。これがなかなか楽しいのです。

クリスマスケーキ買おうか買うまいか

夫婦二人だけの暮らしになりますと大きすぎるのです。

一寸の光陰軽んじて三日

一年の計は元旦にあります。三日は新年の季語で一月三日のことです。

いただいて困る草書の年賀状

なかなか読めないのです。

噓してしたたかに舌嚙みにけり

風邪は大したことはなかったのですが。

裸木のさらに剪定されており

まるで、あこぎな折檻のようです。

曇りのち雨なりバレンタインの日

世の中そう上手くはいかないものです。

色即是空空即是色四月馬鹿

般若心経のエッセンスを俳句にしました。

友が来て友の友来てさくらの夜

友だちの友達は友だちであります。

若鮎の空揚げにされ売られけり

正岡子規に「若鮎の二手になりて上りけり」の句があります。スーパーでの句です。

しゃぼん玉宿六という愛し方

愛にもいろいろなかたちがあります。

鶯にするか桜か店の前

鶯は鳥で、さくらは花ですが、鳥でも花でもありません。

買ったのはとなりの街のかしわ餅

あげくの果てです。

チンピラが鳩になるなり鷹もまた

「遊五人展」の似ていない自画像のようなものです。

**チンピラは蛤となるスズメまた**

もう一度言いますが、俳句で大切なことは、元気で、楽しく、くだらないと  
いうことでもあります。お終いでございます。